

——どれくらい眠っていただろう。

ロレアは重たい瞼を開けた。

「ようやくお目覚めですか。」

男の声を聞いた瞬間、冷や水をかけられたようにロレアの意識が鮮明になった。

純白の天蓋付きベッドの上、磨き上げられた家具が並ぶ豪華な部屋の中、ロレアが顔を上げると、紫の瞳と目が合った。ロレアと彼女の恋人アルヴィンを追いつめ続けてきた宿敵、リュシオだ。シミひとつない白い肌に鋭い光を宿した瞳。

相変わらず殴りつけたくなるほど整った顔だった。

リュシオの顔を見てロレアは鮮明に思い出した。アルヴィンを助けるために囷として振る舞い、敵であるこの男に捕らわれたことを。

恐らく敵の手に堕ちた後、この部屋に連れてこられたのだろう。アルヴィンは無事逃げられたのだろうか。そのことが気になった。

「残念ですが、貴女の恋人は捕らえました。」

リュシオはロレアの考えていることを見透かしたように言った。

「無駄な抵抗はやめてください。彼の命が大切なら。」

リュシオは穏やかな声でそう続ける。

大方、アルヴィンを人質にしてロレアに言うことを聞かせようという魂胆だろう。

「……抵抗はやめろって、拷問でもする気？」

尋ねるとリュシオはまさか、というように大げさに肩をすくめてみせた。

「そんなことはしませんよ。私には貴女の力が必要です。貴女の身体を傷つけるようなことはしません。」

「だったら、何をするつもりなの？」

リュシオは悪戯っぽく笑った。世の中の大半の女性を蕩けさせるであろうこの笑顔も、ロレアにとっては不快にしか感じられない。

「何かされる、という前提は動かないようですね。」

：まあ、貴女と貴女の恋人には随分と手を焼かされましたからね。きちんと罰を受けてもらわないと、とは思っています。」

そう言ってリュシオはゆつくりとロレアの方に歩み寄ってきた。

（何をするつもりなの？予想がつかない…。）

逃亡を試みようかとも思ったが、出口の扉はリュシオの後ろ側に一つだけ。アルヴィンの無事が確認できていない以上、今逃げ出すのはあまりにも危険だ。

ロレアは警戒を込めた目でリュシオの動向を見ていた。

リュシオはロレアの前まで来ると立ち止まった。ベットの上に座っている状態なのでリュシオに見下ろされるような格好になる。

「貴方の身体に傷を付けずに苦しめる方法もあるんですよ。」

リュシオはくすりと笑うと、ロレアの首元に手を伸ばしてするりと撫でた。

「……っ！」

瞬間、ロレアの腕が泡立つ。

（……！？まさか、この男……！）

経験はないが知識としては知っている。いつかアルヴィンとであればしてもいい。そう思っていた行為を、今、目の前の敵がしようとしている。反射的にやめさせようと手が動いたが、アルヴィンの顔が浮かんで動けなくなった。もしも本当にアルヴィンが捕らわれていたとしたら、今ここでロレアが反抗すればどんな目に遭わされるかわからない。そんな不安がよぎって身体が動かなかった。

リュシオはまるで飼い猫でもあやすようにロレアの首元を弄ぶ。顎の下をなぞり耳元まで上がった指がまた首を伝って鎖骨を撫でる。

くすぐつたいような焦らされるような感覚にロレアは唇を結んで耐えていた。

「貴女の手足は縛っていません。

抵抗しようと思えばできるはずですが……

やはりアルヴィンのことが大切なのですね。」

「つ…当たり前、でしょ……。」

自分でも驚くほど、情けない声しか出せなかった。他人にそういう目的を持って触られたのは初めてで、ロレアは平静を装うのに必死だった。

「わかりました。それでは私の好きにさせてもらうので、貴女はせいぜいいい子にしてください。」

首を撫でていた手が顎をなぞりそのまま口元まで上がってくる。

「キスをしたことはあるんですか？」

リュシオは指でロレアの唇を押しながら尋ねてくる。

「あるわ。アルヴィンと……。」

「まあ、どうでもいいことですが。どちらにしろ……頂きますね。」

リュシオは慣れた手つきでロレアの顎を持ち上げると、そのまま唇を重ねてきた。

「んんっ！」

ロレアは嫌悪に顔を歪め、必死に唇を閉じて、リュシオがこれ以上深く入り込めないようにした。

リュシオはそんなロレアの反抗に気がついて、軽く鼻で笑うと、ロレアを揶揄うように何度も角度を変えてキスをしてきた。

リュシオのキスが続き、うまく呼吸をすることができず、ロレアは空気を求めて口を開いてしまう。すると、熱い何かが口の中に侵入してきた。

それがリュシオの舌だと気づくよりも早く、リュシオの舌はロレアの口蓋を舐め、舌を絡め取った。

「…んんっ！」

（やだっ！口の中まで…！）

ゾクゾクとした感覚が湧いてきて下腹部が熱くなる。

思わず身を引こうとした瞬間、リュシオは逃げるのは許さないとばかりにロレアの頭を押さえた。

「んっ！ふんん！……んん！」

アルヴィンとしたものとはまるで違う、ただただ舐められるようなキスだった。

リュシオの唇がようやく離される。

「そんなに息を荒げて……アルヴィンは貴方を良くしてくれなかったんですか？」

リュシオはロレアの顎を持ち上げ、じつと見つめる。ロレアは答えず、代わりに思い切り睨みつけると、リュシオは楽しげにふつと笑った。

そのまま遠慮する様子もなく、ロレアの胸元に手を伸ばしてきた。

「ちよつと！何するの？！」

ロレアは思わず叫んだ。リュシオが服の上から両手でロレアの胸を包んできたのだ。

寝ている間に着替えさせられた薄いシルクのワンピースは悪趣味な蹂躪から身を守るにはあまりにも頼りない。

「見かけ通りの細やかさですね。可愛らしい。」

リュシオは形を確かめるようにロレアの胸を手で包んで、丸くなぞる。ロレアの意思とは関係なく、ロレアの胸はリュシオの大きな手の中で自在に形を変えられていく。時折リュシオの指が頂きを掠めると痺れるような快感が走った。

「…っ！…く、う…！」

痺れが走るたび声が漏れそうになる。

ロレアの胸の頂はまるでリュシオに触れられることを期待しているみたいにぷつくりと膨らんでしまっている。

リュシオはその先端を爪の先でカリカリと擦った。

「おかしいですね。固くなっているようですが……。まさか、感じているんですか？」

リュシオは楽しげに尋ねてくる。

「…馬鹿なこと…言わないで。

そんな、わけっ…ないでしょ……。」

油断するとおかしな声が出そうになる。ロレアは平静を装って答えた。

「それは良かった。このくらいで根を上げられては、つまらないですからね。」

言葉では否定したし、ロレア自身も決して認めたくはないのだが、先ほどからどうにも身体がおかしい。リュシオに触れられた場所から発せられた熱が一点に集められているかのように、お腹の下部分が熱くてたまらないのだ。

鼻にかかるような甘えた声が喉から漏れ出そうになるし、きつと頬も真っ赤だ。

「ここはこのくらいにしておきましようか。」

リュシオの手が胸から離れたことに安堵したのも束の間。リュシオがベツドの上に乗ってきた。

「ちよつと！何？」

リュシオはロレアの腰に手を回して、ロレアの身体を自分の方に引き寄せた。自然、リュシオに後ろから抱かれるような格好になる。

そのままリュシオはロレアの脇腹を撫で始めた。細長い十本の指で、動いているかいないかわからないほどのゆつくりしたスピードで。蛇に這わ

れているようなぞわぞわとする感覚に襲われる。

「つく…んうつ…。」

ずっと我慢していた声が抑えられなくなってきた。

ロレアとリュシオ。二人しかない部屋だからやけにロレアの声が目立って聞こえる。

「脇腹が弱い女性は多いですが、貴女も弱いみたいですね。」

リュシオが話すと息がかかって耳がくすぐつたい。それがまたリュシオの距離の近さを感じさせて屈辱的な気持ち煽る。

くすぐすと笑いながらもリュシオは決して手を休めない。無理に与えられる快楽から逃れるようにロレアは身体を捻る。それでもリュシオはロレアの弱いところを的確に見つけ出しては、しつこく撫でた。

「脈が早くなっていますし、呼吸も苦しそうですよ。」

「ふっ…！ううっ！気のせい…よ。」

ロレアは声が我慢できなくなってきた、両手で口を押さえて声が出ないようにした。それを見たリュシオは、片方の手でロレアの腕を脇の裏から手の甲まですると撫でた。

本当に性格の悪い男だ、とロレアは心の中で悪態をつく。

力が抜けて腕が落ちそうになったが、必死に堪えた。この手を離せばますます情けない声をリュシオ聞かせてしまうことになる。

リュシオの腕が離れたと思うと、今度は太ももを掴まれてぐつと引かれた。足が曲がり、持ち上げられる。

「あつ、やだっ！」

「この足で散々私から逃げ回ってくれましたね。」

ロレアが自分の体勢を気にする間も無く、今度は後ろから脚に手を伸ばして、足の裏に触れてきた。

「こうして見てみれば、小さな足ですね。この足で必死に逃げ回っていたわけですか。∴無駄だというのに。」

くすぐるように足の裏に触れるとそのままふくらはぎ、太ももを通って足の付け根までつうつと撫でられる。太腿の付け根まで指一本で何度も何度もルートを変えながら。

「ふふっ、今はこうして好きに触れることができる。」

気まぐれに折り返した指が内腿をゆるく撫でると身体が震えた。

「ううっ！……やっ！……あう！」

指が敏感なところを通るたび、声が漏れた。

リュシオの指に熱が運ばれていくようにまたお腹の下の辺りに熱が集められていく。

「あっ！」

ロレアは思わず声を上げた。

後ろから伸ばされた手がロレアの秘部に触れたからだ。

また撫でられると思って身を硬くしたがそのまま動かない。軽く押さえ

つけたままだ。

「まだ何もしていません。押さえているだけですよ。」

リュシオの言った通りだった。リュシオの手はロレアの秘められた場所をすつぽりと包んだまま動かない。

ありえない場所にリュシオの体温を感じる。ロレアの顔が羞恥で赤くなつた。

「服の上からでも湿っているのが分かりますよ。あなたのここ。」

右耳にリュシオの息がかかる。低い声で耳元で囁かれるとぞくぞくする。反射的に左に逃げると今度は左の耳に囁かれた。

「意外とその気になっているのではありませんか？」

「うるさい！ふざけたこと、言わないで……。」

左にも右にも行くことができなくてロレアはただ俯いて目をぎゅつと閉じた。

「貴女の一番弱いところ。たくさん可愛がつてあげましょうね。」

まずは下着の上から何度も何度も割れ目をなぞりましょう。ゆつくりゆつくり。貴女が一番嫌がるやり方で。下着の上からでも貴方の蜜でできた染みが見えるようになるまでね。

それから下着を取って、直接虐めてあげましょう。

想像して見てください。貴女は感じたくないと思いますが、甘い声を抑えられない。」

まるで期待するようにロレアの体の内側から蜜が溢れてくる。こんなに

自分が淫らだったなんて、信じられない思いがした。

リュシオがほんの少し指を動かした。

「ひゃん！」

自分でも驚くほど、大きな声が出た。

（やだ…何、今の声？）

ロレアの顔がみるみる赤みを帯びていくのを見て、リュシオはクスクスと笑っている。

「ロレア、ずっとこうやって貴女のこと苛めてみたかったんですよ。貴女のあの澄ました顔がどんな風に崩れるのか、見てみたかったのですね。」

ねえ、教えてくださいよ。憎い男の腕の中で大切なところを触られて嬌声を漏らすのはどんな気分なんですか？」

嘲笑うようにリュシオが囁いた。反論しようと口を開いた刹那、またリュシオがとろけた雌の尖りを撫でた。

「…ああッッ！」

もう意味をなさない甘い声しか上げられない。リュシオが何度も何度もロレアの秘部を撫でるのだ。

全身が心臓になったみたいに、リュシオが指を動かす度、腰がビクビクと反応する。リュシオはロレアの秘部の形をなぞるように迷惑なほど丁寧に撫で回す。

「あつ、やだ！」

下着がずらされロレアの雌芯が露わになる。

「生意気な貴女とのものとは思えないほど小さくて物欲しそうにひくついで。誘っているみたいですね。」

「見ないで…。」

ロレアは恥ずかしくて、ぎゅつと目を瞑った。

リュシオは小さく鼻を鳴らし、秘部の中心には触れずその周りを円を描くように撫でる。

「くうっ、ううん…! やっ!」

それから、二本の指で蕾を挟まれてゆつくりとゆつくりと撫で上げられる。

「ああっ！ううう……！」

「よく啼きますね。」

なぜこういうことを「犯す」というのかよくわかった。身体の動きの自由も声を発する自由も思考の自由も全て奪われるからだ。

「もう……やめ……。」「

「私にお願いですか？貴女が、敵である私に？」

すかさず返ってきた言葉にハッとする。

そもそもロレアが敵であるこの男に屈することなどあつてはならないことなのだ。まして何かを頼むなど。カアッと頬が熱くなった。

「静かになりましたね。言つたでしょう。せいぜい大人しくしていると。」

……ああ、喘ぎ声ならあげてもいいですよ。まあ、貴女があげたいのなら、ですが。」

悔しくてたまらなくて涙が出た。

声を聞かせればリュシオが喜ぶだけなのに堪えることができない。声を押さえるためにまた手で口を抑えようとするが、もはや腕に力が入らない。

「ふふつ、気持ちが悪くて泣いているのですか。」

リュシオは優しい手つきでロレアの涙を掬う。

そんなはずがないと、リュシオは分かっているはずだ。本当に意地が悪

い。

嫌がらせのようにくちゅ、くちゅ、とリュシオは卑猥な水音を立てる。

「この音、聞こえますか？ 貴女が私に触られて感じた証拠ですよ。

憎い男に触られてこんな状態になっているなんて、貴女の恋人が知ったらどんな反応をするでしょうね？ 正直予想外でしたよ。貴女がこんなに…

」

「うるさい……！」

「うるさい？ 貴女がこんなに濡らしたからでしょう。」

「違っ…ひゃあ！」

「ふふっ、初々しい反応をする。」

お腹の下の方に圧迫感があつて、何事かと見下ろすと、リュシオの指が入っていた。

リュシオの長い指は探るようにロレアの中を少し進んでまた戻る。
ある一点に触れた時、ロレアの頭が真っ白になった。

「ああああああッ！」

「そんなに叫んで。ここはそんなに良いですか？」

「そこっ、やつ！」

「そうですか。そうですか。」

それではもつと虐めてあげましょうね。」

「いつ、やつ！あぁっ！」

暴力的な快感を逃すようにロレアは足をバタつかせる。

「そんなに暴れないで。貴女の大切な恋人の命は私が握っていることをお忘れなく。」

リュシオの言葉を聞いて、ロレアは動きを止めざるを得なかった。

「まあ…彼も貴女のこんな姿を見たら、幻滅してしまうかもしれませんがね。」

「……このっ！」

いちいち言つてほしくない言葉を選んでリュシオは言ってくる。

快感を逃す手段も失つて、ロレアはもはや声を上げる以外の行動ができなくなっていた。快樂も与えられ過ぎれば、もはや毒になる。

何度も何度も弱いところを擦られて。追い詰められるような感覚にロレアは震えた。

声に乗せて快樂を逃がそうとするが、それも叶わず、ついには限界まで追いやられた。

「ッ~~~~~！」

「達してしまいましたね。」

顎を持ち上げられて下を向いたリュシオと目が合う。目の前にある心底、楽しそうな顔に殺意が湧いた。

「犯したいならさつきと犯せばいいでしょ……」

そしてもう終わりにしてほしい。リュシオにぐつたりともたれかかったままロレアは譫言のように言った。

「言ったでしょう。貴女には罰を受けてもらわないといけないと、と。

じつくりと時間をかけてほだされる方が人はより苦しいものですから。

どんなに苦しくてもやめて欲しくても貴女は抵抗できない。ただ私に感じさせられて啼いて、泣いて。……最高でしょう？」

「……最悪よ。」

その夜、ロレアは一晩中啼かされ続けた。